（1972年6月3日第三種郵便物認可）

赤★星

THE SEKISEI（RED STAR／ROTE STERN）

編集　共産主義者同盟（DER BUND DER KOMMUNISTEN）

発行所　蜂起社　東京都江東区大島3－9－25／TEL 03－5626－8262
（関西支社）大阪市北区菅栄町10－10 岸本ビル／TEL 06－6357－6975
発行人　南　安明　〈振替〉00120－2－1512　蜂起社・南安明

月刊　5月2001年　No. 5（通巻347号）
本号300円（毎月1日発行）
年間購読料　1部 3000円（送料別）
（送料）密封1000円　開封800円

紙面内容

1 共産同再建へ／5．1メーデー
2 アメリカの新しい労働運動 ニュー・ボイス派の主張を読む
3 アソシエ／下層ユニオン／組対法
4 連載「試論・ブントと新左翼運動を検証する」蔵田計成

5.1 新宿メーデー

全都から500名が決起

都交渉を勝ち取る

5月1日、第7回新宿メーデーが全都野宿労働者統一行動実行委員会の主催で500名の結集で勝ち取られた。

会場の柏木公園には全都各地－新宿、山谷（上野・隅田川）、池袋、渋谷、東京駅、新たに大田区や三多摩の仲間が続々と結集。そして寿の仲間に支援者（例年になく新しい支援や外国人の仲間の参加も増えた）を加え、あいにくの寒空を吹き飛ばす熱気があふれる中、開会が宣言された。

まず、社民党の保坂展人衆院議員より「人間として生きてゆく基本的権利が確立される社会へ向けてともに闘ってゆきたい」と連帯のあいさつがなされた。国会議員の参加は初めてだが粘り強い大衆行動の積み重ねの成果であって、小泉を批判もなく迎えた「連合」は恥を知るべきだ。

続いて基調提起に移り、3年前に掲げた「自立支援センターの早期開設を」の要求は確実に成果を挙げ、行政の姿勢を大きく変えてきたこと。しかしながら、この程度の規模で行政の責任が果たされたわけではない。中長期的な就労対策、住宅対策など、屋根と仕事に結びつく対策の拡大・拡充を行政にぶつけ、より具体的な前進を勝ち取ろうと提起された。そして本日の都庁デモと代表団の交渉を大きなステップとして闘い抜くことが確認された。

決意表明は、新宿連絡会、山谷争議団、渋谷のじれん、池袋連絡会（過去最高の45名の参加）、新たに参加した三多摩地区野宿者有志のそれぞれから力強いアピールがなされ、西部共闘より連帯のあいさつを受け、全員で「がんばろう！」を三唱してデモに出発だ。

デモは大勢の通行人で賑わう新宿西口界隈を「仕事よこせ！屋根をつくれ！」と元気いっぱいにコールしながら練り歩き、都庁前では響きわたるシュプレヒコールと飛び入りの和太鼓が轟くなかを、代表団が拍手に送られ都庁に入る。解散地の中央公園では、代表団の帰りを待って集会が続けられた。大田区の野宿の仲間、三鷹自由労働組合、山谷会館活動委、寿日労、名古屋の仲間、野宿者を描き続けている画家のジェフ・リードさん、フランスからの支援者、和太鼓の披露など、いつになく多彩な顔ぶれがアピールを行った。

そして、1時間の交渉を終えて戻った代表団から結果の報告。交渉は、自立支援センターを秋までに3カ所（墨田、豊島、渋谷）実現させること（合計で5カ所）を確約させ、就労・住宅対策ではより前向きな回答を引き出すなど、大きな前進を勝ち取った。この成果を打ち固め、さらなる都・国へ向けた大衆行動を積み上げてゆくことを確認し全行動を終えた。（藤川）

釜ヶ崎メーデー 700名の結集で闘われる

第32回釜ヶ崎メーデーは、例年通り、反失連と釜日労の呼びかけで700名の結集で闘われた。

恒例の4月30日の前段集会を三角公園で勝ち取りメーデー当日の5月1日には、センター内での決起集会から三角公園での集会を経て、難波までのデモが、700名の力強い隊列で闘い抜かれる。

今年度の高齢者特別清掃（特掃）登録は、3300名を超え、仕事が仲間に回る回数は、月に二度という状況になっている、反失連では、今年も6月期野営闘争で大阪府・市に要求を叩きつける予定だ。ともに団結して頑張ろう。（喜多）

希望の赤い星

共産同（ブント）の再建と新左翼運動の再生へ挑む！

ローテ・シュテルン

プロレタリアートの解放を歴史的な使命とする共産主義者にとって――その目的、革命の実現のために――、党組織建設の問題は、核心をなす課題である。

それゆえ、共産主義者たらんとする者は、いかにしてプロレタリアートの中に深く根を下ろし、その怒り・苦しみを血と肉にして団結力（政治組織－階級形成）を――時代状況・情勢と鋭く切り結びながら――、創り上げていくことができるか、ということに不断の関心を払わねばならない。

マルクスやレーニンにとって、共産主義者の党とは、そもそも生身の人間の集団としての限界をもち、歴史的な制約や困難を受けざるをえない有限な存在であるがゆえに、いくつもの抑圧と苦難を乗り越えねばならない「鉄と火の試練」をくぐり抜ける中で、不断の自己変革を迫られて成長していくべき存在として見なされていたのである。その組織観は、「一枚岩」の無謬な物神化された存在、絶対的で不変な組織、「理想郷」として党を見なしたスターリン主義（あるいは、その裏返しの反スタ主義）のそれとは、まさに対極をなしていたと言える。

つまり、革命的実践活動の中で、「敗北を教訓に」「試練を糧に」して常に原点に立ち戻りながら自己を点検し、自分自身の失敗・誤り・弱さ・欠点を正し克服していく――自己を変革し新しく再生していく――ことができる思想的な力、要するに組織思想・団結の原理・組織論を磨き鍛え上げていくことこそ、共産主義者としての不可欠な条件だということである。

私自身、もう一度、組織論を一から学び直さなければと思ったのは、自分たちの組織の有り様、現状に対して「何か変だ」「このままでは駄目だ」という疑問に直面したからだ。疑問をそのままにしてパトスが湧いてくるはずもない。では、自分たちの組織（団結）の原理（思想）って何だ、本当に自分たちが「お手本」（自明の理）としてきたレーニンの組織論と同じなのか、そういう問題意識から私は、初めてまともにレーニンの組織論を一から学び直していった。

そうすると、今まで当たり前だと思い込んでいたレーニンの組織論（自分たちの組織観）が、実はそうではない、似て非なるものであったことに気付かされた。

あえてレーニンの組織論に学ぶ意味

私は、レーニンが定式化した「民主主義的中央集権制」の組織論を、「理想的なもの」とし見ているわけではない。レーニン自身も決してこれが「理想像」だとして描いたわけではなかろう。たしかに「民主主義的中央集権制」自体、矛盾・ジレンマを抱えた組織原理である。それは、時には脆く危さを持つ「民主主義」と官僚主義に陥る恐れのある「中央集権制」という対照的で相反するとも言えるベクトル（指向性）を有するがゆえに二律背反の難問を孕まざるをえない。だが、縦糸と横糸とがしっかりと織り合わさっていない布は糸がすぐほつれてバラバラになりやすいように、二つの対照的な要素――剛と柔といった――が重なり合わず両義性をかねそなえていない組織ほど脆弱で適応不全に陥りやすいのである。

意見の相違や対立、意識上の落差を抱えない「一枚岩」の組織などフィクション（虚構）にすぎない。レーニンの時代のボルシェヴィキ党が、いったい、いつ一枚岩だったことがあったのか。問題は、個人的な軋轢や反目・不満を増幅させて党的団結を掘り崩し分裂の危機を招くのではなく――2次ブントの有り様だ――組織の担い手一人ひとりが「思想上の明瞭さ」（レーニン）を実証し「統一意志の形成」に責任を負う、という思想的土壌を組織内にしっかりと育めるかどうかである。それが党的団結を左右し保障する条件である。

これは極めて「難儀な業」に違いない。だが、レーニンは決して耳ざわりのいい言葉を並べて気を引こうとはしなかった。あえて困難な課題を突き付け、それを避けては組織は建設できない、ということを強調し続けたのだ。

60年－70年の二大安保闘争をはじめ大衆行動においては、「戦いの旗手」としてダイナミズムを発揮したブントではあったが、こと組織建設にあっては、二度三度と分裂し離合集散を繰り返して日共や革共同の後塵を拝する始末だ。何故か。組織論的に言えば、ブントは、情勢の進展や変化に対応して組織活動（の方針）を絶えずつくり変え再編成するというラディカルな性格（組織思想）を持ちあわせていなかったからだ。

我々が、レーニンの組織思想を内在化し、ブントの「負の歴史」から学び取ったことは、まさに、このラディカルな組織論上の観点であった。それは、恐らくどの党派の理解（解釈）するレーニン組織論とも全く異なる見解であろう。だが、ここにブント再建のキーポイントがある。

赤井　隆樹

アメリカ

『新しい世紀のための新しい労働運動』ニュー・ボイス派の主張を読む

《上》惨めな時代と旧い殻からの訣別
アメリカ労働運動の転換と再生

植渡

はじめに

一昨年、1999年12月、WTO（世界貿易機関）の閣僚会議を「幕切れ」（タイムアウト）に追い込んだアメリカ・シアトルの民衆の反乱は、失業や貧困に苦しむ全世界の労働者・人民が連帯して、帝国主義・多国籍独占資本のグローバリゼーションと新自由主義に反撃する闘いに立ち上がり始めたことを世界中に知らしめすものであった。

このシアトルを揺るがした大衆行動において、AFL-CIO（アメリカ労働総同盟－産業別組合会議）は、戦列に加わってWTOとグローバリゼーションに反対する闘いの一翼を担った。それは、ある意味で衝撃的なことだった。なぜなら、それまでAFL-CIOといえば悪名高いCIAの労組版とやゆされるほど反共色が濃く労資協調主義で米政府の「御用組合」と見なされていたからだ。

だが、このAFL-CIOは、1995年の会長選挙をめぐって、反主流派で「ニュー・ボイス」（新しい声）というグループを率いていたジョン・スウィニーへの指導部の交代をもたらして以降、大きく路線を転換させていた。それまでの旧い殻を自ら食い破って「新しい労働運動」が生み出されていたのだ。それは、まさに「惨めな停滞の時代」から訣別しアメリカ労働運動の転換と再生を告げるものだった。

AFL-CIOの会長選挙でニュー・ボイス派のジョン・スウィニーが勝利したことは、アメリカの労働運動にとって新時代を拓く一大画期と見なされた。選挙の争点は、「なぜこれほどまでに労働組合の社会的地位は低下し、惨めな時代に陥ったのか、どうすれば状況を変え、労働運動の再生が図れるのか」に絞られていた。スウィニーの勝利は、ニュー・ボイス派の主張の方が、「はっきりと過去から訣別しており、未来への希望を代表している」（グレゴリー・マンツィオス）と大会代議員に判断されたからであった。ある評者は、アメリカ労働運動はついに「長く深い眠りから目覚めた」と表現した。

一方、これとまったく対照的に、我が国のナショナルセンターを代表する連合は、メーデーを今年から一部を除き4月28日に変更した。5月1日は、連休のさなかで「メーデーよりレジャー」という時流に迎合したことによる。実際、「連休が潰れる」という組合員の声に配慮したものと説明されているのだ。

だが、「潰れかねない」状況にあるのは、連合それ自身である、という危機感こそ持つべきであろう。初の「前倒し」メーデーならぬエープリルデー開催に対するマスコミの取り上げ方にもそれは表されていたと言える。報道の目玉は、新首相に就任直後の小泉の出席だった。その連合主催の第72回メーデー中央大会（東京・代々木公園）のパンフレットには、「世直し／怒りの第72回メーデー」というキャッチ・コピーが躍っていた。何というブラック・ジョーク、皮肉だろうか。労働者の怒りが、連合指導部に向けられ、指導部を代えようという情熱に転化する日は、必ずや訪れるに違いない。

この国の労働運動を取り巻く状況が激変しかつ厳しさを増している中で、労働組合自体の存在理由（レゾン・デートル）も根本から問われている。

組合に入りたくても入れない多くの労働者――パート・臨時・日雇の労働者や失業・野宿を強いられている労働者等の下層労働者たち――が増大しているにもかかわらず、「門戸を閉ざしてきた」労働組合自身が自己変革しない限り、この国の（既存の）労働運動はおそらく滅びるであろう、と我々は考えている。この問題意識に関する限り、アメリカの新しい労働運動、ニュー・ボイス派の主張と我々の見解とは一致する。

本稿は、惨めな時代と旧い殻から訣別し、再生を目指すアメリカの新しい労働運動－「ニュー・ボイス」（新しい声）派の担い手（労働組合活動家）やそれを支える研究者らの議論・提言・主張をまとめた論文集である『新しい世紀のための新しい労働運動』（98年3月、マンスリー・レビュー社発行、グレゴリー・マンツィオス編集）――日本語版（要訳）『21世紀に向けた新しい労働運動』、連合・総合組織局（99年9月22日発行）――を読み、その示唆に富んだ内容を（紙幅の許す限り）吟味し紹介しながら、アメリカの新しい労働運動の担い手たちが、いかに旧い殻から抜け出し運動－組織路線を模索しその転換を図ってきたのかを知ることによって、今後、日本の労働運動をラディカルにつくり変え再生していくための一助になることができるのではないか、という思いから執筆した。

アメリカの労働運動の新しい息吹き、その転換と再生は、日本の労働運動の階級的な再生という課題にとって、また、グローバリゼーションに対する国際的な連帯と反撃を組織する上で、大きな意義と励ましを我々に与えてくれるに違いない。

AFL-CIOのニュー・ボイス派への指導部の交代

『新しい世紀のための新しい労働運動』を編集したグレゴリー・マンツィオスは、「序章」で、95年のAFL-CIO会長選挙でのスウィニーらニュー・ボイス派の勝利と指導部の交代によってもたらされたアメリカ労働運動の歴史的な転換について次のように述べている。

「この20年間は、労働者と労働組合にとって、特にその貧しい層にとっては、今世紀最悪の時であった。企業と政府からの攻撃により労働組合は、組織人員と政治的影響力を削がれた。」

まさに、「AFL-CIOの歴史的な95年の大会の背景をなしたのは、過去の敗北と将来への課題であった」。そして、「指導部を代えようという情熱は、労働者の生活条件は改善できるはずであり、組織人員の低下は逆転することができるはずだという確信に裏付けられていた。指導部の交代は、受け身で狭く時代遅れの労働組合の終焉を意味していた。」

この95年10月のAFL-CIO大会の前夜、クインズ大学・労働資料センターで持たれた会議に提出されたリポートをベースに、同大学教授で労働者教育部長をしているグレゴリー・マンツィオス――彼は、大学付属の労働者教育センター等で、労働運動や社会運動のための人材育成を目指して労働問題や貧困・不平等などについて教えている――によって編集・出版されたのが、論文集『新しい世紀のための新しい労働運動』なのである。

「労働運動の歴史的な使命に再び生命を吹き込んだ」ニュー・ボイス派は、ジョン・スウィニー自身が「私の理想とする労働運動は、常に自己を点検し、自分自身の欠点を正せることのできる労働運動である」（「あとがき」）と語っているように、過去と訣別して、有色人種－女性労働者との連帯に力点を置き、労働運動は、「社会運動の支柱」へとラディカルに自らを変える必要があると訴えている。

しかし同時に、マンツィオスらこの論文集の寄稿者たちは、スウィニー会長をはじめAFL-CIO現指導部の「古い見方」――たとえば社会契約型労資協調のイデオロギー――に異議を唱え、公然と批判的見解を明らかにしている。

このように本論文集は、労働運動の再生に向けて、異なった主張を有する活動家や研究者たちが一堂に会し議論を闘わせながらまとめられたものなのである。

寄稿者たちは、「既に動き始めている過程の触媒たらんとしていて」、「よくあるような傍観者的な批評家でもなければ、内部抗争の敗残者でもない」、「皆長らく労働陣営の中で苦闘してきた人たちであ」る。

しかも、本論文集は、「これまでの本と異なり、未来に焦点を当て、一般的な読者を対象にしている。刺激的な議論に終わるのでなく、実践に結実する主張を目指しているのである。」（ダン・ジョーガカス）

『新しい世紀のための新しい労働運動』の目的・性格・特徴について、編集者のマンツィオスは、以下のように（「序章」で）述べている。

「この本は、労働運動の将来を主題としているが、その寄稿者たちが心を奪われ取り組んできたのは不平等、不正義、現状の変革といった問題である。

寄稿者は全員、社会変革に深く関り、長い運動歴を持っている。指導者、活動家、教育者などの多様な人たちであり、……皆豊かな経験と正義と行動への情熱を持ちあわせている。寄稿者たちは、これまでの労働運動主流派には批判的であった。……しかし同時に、何をなすべきかという点については各著者はみな異なる相矛盾する意見を持っている。各自の構想、理想、解決策、戦略戦術は皆違っている。」

「労働運動の指導者や活動家たちは労働組合の使命、目的、構造、戦略や戦術について全面的な論争に入り、思想的な多様性が明らかとなった。この論争には労働運動の将来と進路がかかっていた。

この論文集は、その論争を記録し、保存し、発展させようとしたものである。……労働運動についての考えと将来展望を語ってもらうために広く国中の指導者や活動家に呼びかけたのがこの論文集である。その目的は、労働者と労働運動の直面する課題についての討論と論争をさらに巻き起こすことである。

本論文集は、次の五つの課題を中心にまとめられている。①民主主義、イデオロギーと変革、②未組織の組織化、③多様性と統合、④労働者政党と政治、⑤国際関係。各課題について、執筆者各自の構想を語り、……10年後に照準を定めるようにお願いした。労働運動は将来の姿をどう思い描かなければならないか？その新しい役割とは何か？新しく採用しなければならない手法はどのようなものか？」

そして、マンツィオスは、新しい労働運動のベクトルとテーマを次のように設定している。

「この論文集の編集を始めるに当たっての私たちの仮説は、労働運動の成功は、次のことができるかどうかにかかっている、というものであった。

①未組織労働者に働きかけて、組織率の低下を大きく逆転できるか。

②労働者、とりわけ女性や有色人種の労働者に力を与えるような民主的で包容力のある運動を展開し、それを支える理念を提示できるか。

③政治的な共闘を築き、新しい選挙戦略を発展させ、より効果的な大衆的政治行動を促し、地域社会にさらに深く根を下ろすことができるか。

④経済のグローバル化と立ち向かい、国境を越えて労働者同士を競争させている多国籍資本に打ち勝つことができるか。

労働運動が強く活発になることが民主主義と民衆の幸福のために不可欠であるという信念から、この論文集は生まれてきたことを明らかにしておきたい。この20年間は、労働者と労働運動にとって惨めな時代であったが、新しい政治的経済的環境が生まれつつあると信じて間違いない。労働運動の最高指導部が選挙で争われたことは、労働者の日常生活と労働運動自体にとっても分水嶺、転換点となるに違いない。労働運動の最良の戦闘的民主的伝統を引き継いで新しく再生した労働運動こそは、21世紀に向けて社会的経済的正義を目指すアメリカの最良の希望なのである。」

いま、アメリカの労働運動は、「今日の経済や社会にうまく適応していない」（「第3章　旧い殻の中の『新しい労働運動』か」）。「1980年代、90年代の間に、AFL-CIOは、厳かにゆっくりと崩壊してきた。組合員数は、賃金労働者の15・5％にまで落ち込み、民間部門では、わずか11・2％にすぎない」（同）という状況にある。

だが、「労働組合が『停滞している時代』に、進歩的な政治的思想を持った改革運動や地方の活動家、指導者、スタッフたちが多数あらわれた」。彼らは、「ニュー・ボイス」と称して1400万人の労働者を代表するAFL-CIO旧指導部の長年にわたる「孤立と怠慢」を厳しく批判し、「AFL-CIOは、サービス機関としての組合を強調するよりも、むしろ、社会運動の組織者としての組合」になり、「勤労者の進歩的な新しい政治運動を組織し、アメリカの全労働者の声を代弁する運動の先頭に立たねばならない」と主張し、労働運動を新しく再生していく路線を大胆に打ち出すに至ったのである。

（次回は、7月号に掲載）

アソシエ21

4・22第3回年次大会 300名の参加で開催

アソシエ21の第3回年次大会が4月22日に東京大学農学部で約300名の参加を得て開催された。

アソシエ21は「批判的知性」の場の創設をめざし旗揚げをした。目標は①専門化した諸学の学際的討論、②学問的－理論的営為と現実の運動のつき合わせ、③非マルクス主義とマルクス主義との対話、④インターナショナルな討論、ということである。

今年の年次大会は「21世紀の日本を考える」をテーマに午前中に総会を行い、午後は6つの分科会を設定し活発な討論がなされた。第1分科会は「日本政治の混迷と今後の行方」、第2は「グローバリゼーションとIT革命の進行と矛盾」、第3は「21世紀マルクスから何が見えるか」、第4は「教育・大学の現在を問う」、第5は「環境・生命倫理と反原発」、第6は「日本共産党研究」である。

我々は、3つの分科会に参加した。まず、第1分科会。主な報告者は宮崎学、牧野剛、星野智の各氏。宮崎氏は、これまでの無党派層と革新政党の関係が壊れ始めており、都知事・石原や自民党・小泉の支持率アップに収斂されていくことになるのでは、という危険性を指摘する。また、牧野氏は「典型的な土建国家」である愛知県のトヨタ支配と管理教育を批判し、名古屋から、いかに反乱を起こしていくのかをテーマに発言した。会場からは社会大衆党書記長の新垣氏が、地域性という時、沖縄の持っている固有性にこだわり、沖縄という視点を内包した地域性とは何か、という趣旨の問題提起がなされた。

今日の日本（ヤマト）における無党派層と沖縄の民衆意識の対比（落差）こそを我々は見てとらねばならないと考える。その意味で地域性そのものの捉え返しを沖縄からしていくという重要な視点が提起された。

もうひとつ参加したのは第4分科会。「教育と大学の現在を問う」ことをテーマに報告がなされた。報告者は黒沢惟昭、掘茂樹、櫻本陽一、小阪修平、表三郎の各氏。今日、教育現場にかけられてきている攻撃は教育基本法の改悪策動、国立大学「法人化」攻撃、日の丸・君が代の強制、教員・生徒・学生への管理の強化、歴史を改ざんする歴史教科書の採択など矢継ぎ早である。このような教育をめぐる激動ともいうべき状況の下で、予備校や学校現場からの報告があった。グローバリゼーションの拡大の中で新自由主義に基づく教育再編が進行し、「一生懸命やっても無駄」という行き場のなさが問題であるという指摘、また近代の理念である国民国家が崩壊している今、どのように国民国家を越える理念を提出すべきなのか、などの課題が鮮明にされた。国家そのものが揺らいでいる。我々に問われているのは、新たなビジョン－民衆の利害に依拠した新たな社会を構想する創造力である。

第6分科会にも参加し報告と討論を傾聴した。報告者は樋口篤三、塩川喜信、蔵田計成の各氏。

分科会を終えて、全体会に移る。講演は的場昭弘氏。新しいマルクスの可能性は自然と人間の関係を基本に考えることを提起した。

近代日本の閉塞した状況を打開し、21世紀を切り拓くビジョンを！（神谷）

アソシエ21の第3回年次大会が東大農学部校舎で開催される。（4月22日）

分断を越えて団結を 下層ユニオン結成！

4月21日、全下層労働者連帯ユニオン（下層ユニオン）の結成大会が成功裡に勝ち取られた。

下層ユニオンは、臨時・パート労働者、日雇労働者、失業者、野宿労働者など、不安定就労を強いられ、社会の下層に組み敷かれた労働者の基本的権利の確立、就労の保障、労働条件の改善、経済的地位の向上を目指す、下層労働者が主人公の組合である。「ひとりでも入れる」を基本に据え、置かれた立場や境遇を越えて、社会的に排除された人々が結びつく連帯運動の一翼を担うことを目指す。この視座を軸に、組合結成へ向けての論議が積み重ねられてきた。

結成大会の会場（江東区民センター）では、「LUS！01」と染めぬかれた真新しい組合旗が掲げられた。大会準備委のメンバーより結成大会の開会が宣言される。まず、賛同人を引き受けていただいたルポライターの鎌田慧さんと横浜市立大学教授の野本三吉さんのメッセージが読み上げられた。鎌田さんは、「もう、やられっぱなしはやめよう。この辺で腰を据えて腹をくくって、ひと泡吹かせてやろう」「労働者一人一人が自分の存在をかけて自立することが迫られている。そして首切り－リストラの嵐と重層的な差別構造を打ち破っていくために、統一して一矢報いていこう」という組織が必要になってきている」と、下層ユニオンの〝荒野からの出発〟を力強く激励するメッセージを発してくれた。

また、大会に参加した賛同人を代表して、長年にわたって教育現場において労働運動を担ってきた労働者から、この時代に下層ユニオンが結成されることの意義に連帯を表明するという心のこもったあいさつがなされた。続いて、議案書の提起に移り、「情勢・経緯・運動方針」の議案書が読み上げられる。

情勢では、300万人を超える失業者が生み出される状況下で、「不安定就労者層は、そのかなりの割合が劣悪な労働環境の下で、低賃金・長時間労働はもとより、労働者として当然の権利が奪われ企業や産別の労働組合からも排除され、一人一人が分断されているのが現状」と今日の労働政策の本質を明らかにし、分断を越えた労働運動の展望を示した。経緯では、1980年代以降の寄せ場－野宿労働者の闘いの地平をふまえて、フランスや韓国などの運動に体現された反グローバリズムと排除・棄民化に抗する新しい社会運動の質を押さえ、実践の中で推し広げてゆくことが提起された。そして、運動方針ではまず、労働相談活動に着手して、当事者とともに労働条件の改善や不当労働行為をあらためさせる活動を積み上げてゆくこと、学習会をはじめとする取り組みを通して、新たな仲間との出会いや中身の充実を図ること、運動相互の連帯・共闘（反失業闘争や争議支援、共同争議など）を追求すること、さらに広報活動を広げてゆくことなどが提起された。

以上の議案書が、参加者全員の了承をもって確認され、続いて、「下層ユニオン」の規約提起と執行部の選出が行われ、全員が了承した。この後、選出された執行委員の決意表明に続いて、大会に参加したメンバーからも、この新しい労働組合に寄せる思いや期待、決意などが述べられていった。そして最後に「団結がんばろう！」を全員で元気よく唱和して、大会を終えていった。

大会後、最初の大衆行動の場となった5・1新宿メーデーで「LUS！01」の赤旗が翻った。

「構造改革」の名の下に倒産と首切り・リストラの嵐はますます激しさを増すだろう。「下層ユニオン」はまだまだこの嵐に翻弄される小舟のような存在ではあるが、これからが試練の航海となる。大会にみなぎる情熱と気概は、労働運動の新たな時代を切り拓いてゆくに違いない。ともにがんばろう！（藤川）

警察管理型社会を解体しよう！ 反組対法集会勝ち取る

「警察管理型社会を解体しよう！ 2002年 組対法・刑訴法改悪 治安国家化を許さない 4・21集会」が文京区民センターで行われた。主催は、破防法・組対法に反対する共同行動、組対法に反対する全国ネットワーク。

集会ではまず、共同行動を代表して小田原紀雄さんより、警察管理型社会の進行状況と国際的組織犯罪条約の問題性が指摘され、来年をにらんだ闘いの方向性が基調として提起された。続いて、劇作家の別役実さんより「犯罪は時代の鏡だ」と題する講演がなされ、東京造形大学教授の前田朗さんより「国際組織犯罪対策条約」についての問題点の分析が提起された。

この条約は、グローバリゼーション時代に対応してアメリカを中心に「闘う市民社会」の形成を背景としながら、国際組織犯罪の増加と深刻化を名目とすることで、犯罪捜査における国家間の相互協力とハイテク化を狙ったものである。

具体的には、実行行為の有無にかかわらず、組織的犯罪集団への共謀や参加自体を取り締まることが可能になり、電子的な監視や覆面捜査が機能的にできるようになり、マネーロンダリング規制の拡大によって弁護士や税理士への規制が強化されるというものだ。いわば、組対法の狙いを国際的にスケール・アップする性格を持つ。条約は既に2000年12月に国連総会で採択され、法務省によれば「整合性をつけるために国内法を整備し、それを受けて条約を批准する」予定だという。批准は来年にも国会提出の予定で、併せて組対法の改悪が目論まれている情勢だ。

前田さんの提起ではさらに、日本の治安当局がこの動きに乗じて「市民社会の安全」を名目に新たな治安体制を構築する狙いがあること、それはメディアと市民社会を味方につけて、相互監視社会をつくりながら警察の権限を強化して、いわば日本型「闘う市民社会」の形成という巧妙な戦略として進んでいることを注視すべきだと述べた。

続いて、西村正治弁護士、フリーライターの佐藤文明さん、人権と報道連絡会、立川自衛隊監視テント村（9月「防災訓練」は三多摩地域に決定）から連帯のあいさつがなされ、争議団連絡会などの決意表明を受け、治安国家化を許さぬ闘いの決意を全体で確認し、集会を終えた。（藤川）

試論―ブントと新左翼運動を検証する

連載第1回　60年安保闘争とブント主義の捉え返し

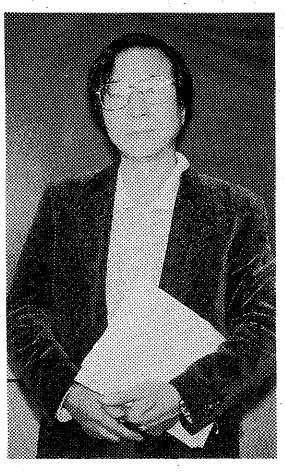
蔵田 計成

戦後日本の階級的激動期に日本共産党から分岐し60年安保闘争を死力を尽くして闘いぬいた若き前衛党・共産主義者同盟（ブント）。第一次ブントは自らが切り拓いた歴史の激動の中で自滅していった。その後、再建された第二次ブントも「組織された暴力と国際主義」を掲げ果敢に闘い抜いたが、「分裂と敗北」を辿った。

われわれはブントが闘い抜いた栄光の歴史を回顧するのではなく、自虐史観ともいえるほどの徹底した「敗北の総括」をしなければならない。そうすることが今日のブントと新左翼運動全体の混迷を脱却する道である。

我々はあえて自らの非力さを承知の上で、「ブント再建」という壮大な目標を自らに課し、真の前衛党建設に向かって「党の革命」と「大衆運動の創出」をまさに両輪として党再建の一歩を踏み出す決意をしている。

蔵田計成氏が提起するブント総括を掲載する意図は、あらためて60年安保ブントの闘いを振り返り、ブントとは何であったのか、その教訓を今日の闘いに生かすことである。多大な教訓を学んでいきたい。（なお、この論文は『情況』3月号に「ブント主義をどう考えるのか、一つの試論」と題して発表されている。同論文を連載するにあたって、『情況』編集部の御厚意に感謝の意を表します。）



■蔵田計成氏プロフィール

34年生まれ。57年早稲田大学に入学。58年日本共産党を経て都学連副委員長。60年安保闘争の全過程を金助町学連書記局員として、首都圏の安保闘争を指導する。以後、雑誌記者を経て評論活動に入る。70年安保－沖縄闘争、全共闘運動においてマスコミ反戦連合委員会を結成し委員長として活躍。現在、反原発運動と反弾圧戦線に積極的に関わると同時に、ブント総括に精力的に取り組んでいる。著書に『安保全学連』『新左翼運動全史』などがある。

序章　いま、何が問われているのか！

島成郎は共産主義者同盟（ブント）創成に自らの全知を傾けてそれを成し遂げた。六〇年安保闘争に死力を尽くし、最高指導者の一人とし最後まで闘い抜いた。彼は名実共に六〇年安保闘争の人格的体現者であり、あの闘いに未来への歴史、理想、希望、青春の情熱を賭けた若者達にとって、自己史の中心的存在であった。その意味で島成郎の死は、われわれにとって一つの時代への寂寥感と時空の終焉を告げるものであった。

島成郎は六〇年安保闘争以来これまで、追憶の会合では常に、あのほとばしる過去の情熱を、変わらぬ言葉で語り続けてきた。同様にわれわれもまた、彼が語りかける相貌の中に、過去の自分の姿を重ね合わせ、様々な思念を巡らせてきた。そのことはあの闘争の日々が、われわれの深奥に通底する政治的原像であり、残映に他ならないことを意味していた。

その六〇年安保闘争は日本階級闘争史上極めて重要な闘いであった。すなわち、第二次世界大戦に敗北を喫した日本資本主義は、アメリカ帝国主義を頂点にした世界帝国主義戦略体制の下における反共最前線基地国家として、戦後資本主義の再建を成し遂げていった。

一九六〇年という年は、日本戦後史がこのような再建過程を辿る中で、復興期から離脱して高度成長期へと飛躍的な発展を遂げ、帝国主義的自立過程に入る歴史の転換期にあった。日米安保条約改定こそは、戦後の従属的な日米関係を清算して、片務協定から対等な双務協定に改変するための重大な政治的セレモニーであった。

この歴史的階級攻防に際して、真っ向から立ち向かっていったのが創成間もない共産主義者同盟（ブント）であった。ブントは一九六〇年当時、階級闘争への糾合力を失いつつあった社共＝既成左翼に代わる新しい前衛として、自らを代置した。その若き前衛党は六〇年安保闘争の全過程において死力を尽くして闘いながらも、自らが創出した巨大な歴史の激動の中で自壊した。

その後、ブントは第二次ブントとして再建されたが、果てしない細分化の道をたどり、ほぼ「消滅」に近い組織状態に陥り現在に至っている。その他の新左翼諸党派も共に創成以来約四十年以上の歳月を経て現在にある。

このように新左翼諸党派は創成以来半世紀近い歳月を刻んできたにも拘わらず、いまだに例外なく大きな困難を余儀なくされている。このことは、疑いのない事実である。その困難さの要因が、政治的社会的情況に深く規定された外在的要因であるとすれば事態は単純である。未来を確信する我々はその困難さに耐えかつ立ち向かうだけのことである。しかし、その困難さが新左翼自身の内部に胚胎する内在的要因に起因しているとすれば、事態は暗転するといわざるを得ない。

例えば、第一次ブント創成に始まり第二次ブント再建→連合赤軍の崩壊に至る十四年間のブントの歴史は苦闘の歴史そのものであった。とくに、連合赤軍が遺した十六名の粛清の衝撃とツメ痕は、未だに大きな影を落としている。また、第一次ブントの多くの人的遺産を引き継いだ第二次革共同は、第一次ブントの運動論を継承した中核派と、組織論における革共同主義を固持する革マル派に分裂した後も、泥沼の党派闘争を演じて久しい。社青同解放派も同様である。これら新左翼諸党派が演じた惨劇の結末は、ある党派の推計によれば二百名にちかい墓標の群像に他ならないという。しかも、深刻な事態はいまもなお継起している！

果たして、過去の世界革命運動史上において、このような悲劇的な歴史があっただろうか。ジャコバン独裁以来の歴史を辿ってみても、政治権力を掌握する以前に、革命党派同士が対立する相手セクトに対して、抹殺の暴力を際限もなく行使した歴史は、知り得る限り希有といえよう。

新左翼諸党派が党派闘争の名において行使したこれら一連の暴力は、ちょうど権力を獲得した後で、自己の権力を保持するために、敵対勢力や反対派に対して権力・党・プロレタリア独裁の名において行使された、あの夥しい歴史の惨劇と、同根にして異質と言うべきであろう。

いやしくも、権力を獲得する以前の革命諸党派たるものは、たとえ己自身が階級関係に逆規定された存在であるとしても、権力を保有している相手支配階級の思想水準よりも、二倍も三倍も高い思想水準において、支配階級を圧倒すべきである。革命党派はその思想性の質においてのみ、互いに自己の党派性を競うべきである。そこで獲得された思想性の質が、人民への深い共感と一体性を獲得することによって初めて巨大な物質力への転化を可能とする。この質量転化の政治的社会的展開力こそが、変革への起動力であり、これが革命のダイナミズムである。しかも、革命党派は不断に自己を止揚されるべき対象として自己定立しているはずであり、即自的な否定的行為をあたかも平然と演じることは許されるはずがない。

新左翼諸党派は支配階級の思想と比べて二倍も三倍も劣る思想の貧困さ、哲学の低劣さを自ら露呈している。もし、愚かさを百も承知の上で信じがたいほどの愚行と禁じ手を敢えて行使しているとすれば、その理由と根拠を人民の前に広く開示すべきである。そこに至る経過、必然性、結果を広く批判に晒すことは極めて有意義である。人民を畏れる政治党派であるならば、自己を開示することは、問題の本質を他者に広く理解させる上で有意義であるばかりか、誤りに歯止めをかける上で、ささやかながら有効な制動力になるかも知れない。また、敢えて禁じ手を行使する理由と根拠を開示することは直接の行為者が負うべき当事者責任である。否定的波及効果は当事者の思惑を遙かに越えて、新左翼全体に及び、計り知れないダメージを与えずにはおかない。このダメージを少しでも緩和するためには、問題の本質を明らかにするための努力を放棄すべきではない。

もちろん、新左翼諸党派の闘いがすべて「否定の対象」というのではない。それどころか、戦後の日本階級闘争史上において、既成左翼諸党派が階級的普遍性を失い体制内化していく中で、新左翼諸党派は多くの政治的、社会的、階級的課題を提起し、新しい闘いの足跡を刻み込んだ。六〇年安保闘争以来、七〇年安保・沖縄・全共闘運動を経て現在に至るまで、さまざまな戦線において多くの成果を残してきた。在日外国人、被差別部落民、女性、障害者、寄せ場などの構造的諸矛盾が集中する社会的階級最深部において、運動の普遍性を求めて反差別＝解放の闘いを創り出すとともに、労働運動、農民運動、住民運動、市民運動、消費者運動などの様々な領域において成果も上げてきた。体制＝企業に寄生化した労働組合組織とのその物質的利益の政治的代理人としての既成左翼のしがらみを越えた、新鮮なエネルギー・ゾーンを生み出したことも事実である。

しかし、先に指摘したように新左翼諸党派はこのような成果を上回るほどの運動の「停滞」「阻害」「破壊」という「負の遺産」を積み上げてきたことは事実である。いまや現在の新左翼諸党派が置かれている社会的、政治的、党派的立場は、六〇年安保闘争当時の社共＝既成左翼が置かれた「屈辱の座」にさえ及ばないと言うべきである。

一方では、時代への新しい社会的政治的胎動が闇を切り裂こうとしている。市民の息吹が政治党派を飛び越えて時代変革への政治の舞台へ登場し、夜明けの到来を告げようとしている。他方では、半世紀にわたって支えてきた歴史への逆動が事態の急迫を告げている。支配のための魔手は市民の日常生活や思想の中にまで忍び込もうとしている。これは暗黒の歴史への回帰である。

現在をある任意の過去の歴史の位相と対比させて照らし出す手法が、歴史への戯れ言に等しいとはいうものの、誰もが痛感するにちがいない。「変革されるべきであった」過去の歴史と、力及ばず「変革され得なかった」現在の歴史を対比したとき、止揚対象としての歴史の到達段階にみる負的落差は余りにも大き過ぎはしないか。これほどに歴史的な黎明と激動の真っただ中にありながら、そこに新左翼諸党派の幻影さえも見いだせない。何がそうさせたのか。

そればかりではない。かつて新左翼諸党派は歴史変革の旗手として歴史的登場を果たしたはずである。歴史を仮定法で語ることが無意味であり、過去の歴史への個人の関わり方を不問にして歴史を論じることが無為徒労であることは百も承知していながら、その歴史の事実に対してはただ驚きを禁じ得ない。さらに、この原因と結果責任を新左翼諸党派が受容するべき立場にあるとすれば、新左翼諸党派は未だに社会的政治的正義の体現者たり得ていない。また、新左翼諸党派は未だに誇るべき思想や哲学も実現し得ていないという痛恨な結論に辿り着くのである。光芒に輝く新左翼の創成理念はいずこへ消えたのだろうか。その創成理念が四十年間もの長きにわたって思弁の時空に晒されてきたも同然であるとするならば、それは「歴史への背理」と断罪されて然るべきである。

革命、闘争、運動の原点に立ち返るまでもなく、新左翼諸党派は「人間として生きるため」にこそ歴史変革に身を投じているはずである。政治党派が真にこの根源的命題に真っ正面から立ち向かっている限り、内ゲバ＝党派闘争の名において一回性（たった一度）の命を奪う理論＝権利など到底持ち得るはずがない。何故か。そもそも戦線の内側に在って、生と死の狭間に屹立する「生きるために殺す」という二律背反的行為を論理化すること自体が自己欺瞞だからである。

また、革命を目指す総ての政治党派にとっては、自己の正当性を主張することと、敵対党派へのむき出しの誹謗と中傷を行うという二つの政治的かつ党派的営為はパラレルに正当化の基準と権利を持ち得るはずがない。前者は権利としての批判行為であり、後者は物理的批判を前提にした敵対的関係の外化形態であり、絶対矛盾に他ならないからである。そもそも、自己の正当性はそれ自体として展開されるべきものである。相手を誹謗・中傷することは一種の自己満足、自己暗示であり、味方内部に敵愾心をかき立てることはできても、正当性を他に向けて自己主張することには役立たない。

本来党派闘争は組織と組織との間に生じた対立や矛盾を止揚するための手段に過ぎないはずである。ところが、手段であるはずの党派闘争が対権力との闘争過程において目的化された途端に凶器へと変質を遂げて暴力行使に至る。このような手段の目的化は明らかに自己倒錯であり政治的転倒である。

新左翼諸党派は暴力的党派闘争をはじめとした不条理な党派闘争に対して全面的に終止符を打ち、統一と団結を目指すべきである。そのためには、意見を異にする組織対組織の関係性を切り結ぶ有効な相互手段を模索し、対立する組織と組織の間の関係性を切り結ぶ有意義な交通形態を追求し、共同体同士の敵対的関係を止揚するための媒介項＝回路を見出す努力をするべきである。これらの関係性の回復と確立は、真の歴史変革を目指す全ての左翼政治党派にとって永久命題であるが、新左翼諸党派にとっては特殊現在的な絶対命題である。

内ゲバ論＝党派闘争論、内々ゲバ論＝党内闘争における問題点を歴史的に解明することは重要である。そのためには、第一次ブントから第二ブントを経て連合赤軍に至るまでの十四年間、連綿と続いた「ブント主義」の総括を媒介にすることが有効であると思う。

（次号へ続く）